

棚田景観の効用

—山形県朝日町「榎平の棚田」を例にして—

高橋悠（山形大学卒業生）・渡辺理絵（山形大学）

棚田景観の効用 - 山形県朝日町「榎平の棚田」を例にして -

高橋悠 (山形大学卒業生)・渡辺理絵 (山形大学)

- I はじめに
 - I-1 研究の背景と研究目的
 - I-2 榎平の棚田の概要
- II 「日本の棚田百選」選定に対する住民の反応
- III 棚田保全の第1の軸
 - 外部からの労働力の確保—
 - III-1 「棚田保全隊」の発足
 - III-2 「棚田保全隊」の多面的な役割
- IV 棚田保全の第2の軸—棚田米の販売—
 - IV-1 「榎平棚田米」の誕生と販売戦略
 - IV-2 「榎平棚田米」誕生の背景
- V 「榎平の棚田」をめぐる変化
 - V-1 首都圏からの観光客の来訪
 - V-2 棚田をめぐる変化に対する住民の反応
 - V-3 棚田をめぐる取り組みの足跡
- VI おわりに

I はじめに

I-1 研究の背景と研究目的

棚田に関心が払われるようになって久しい。農村景観全般に注目が向けられた背景には、1980年代以降、農村の多くが自治体による内発的な地域振興の必要性の中、いわゆる「むらおこし」に取り組んだことにあると指摘されている(岡橋1993)。つづく1990年代には農業の多面的機能が注目されるようになり、農業生産空間は「消費」される対象となった(日本村落研究学会編2005)。農村

はその地域に「住む人びとだけではなく国民全体の社会的共通資本」として「ふるさと資源」化されていく(林良博ほか編2005; 岩本通弥編2007)。

こうした背景に、棚田サミットの開催なども加わって90年代以降、棚田保全活動は活発な動きをみせ、実践例の報告も相次ぎ(たとえば根井ほか1999)。月刊『地理』では「棚田」特集も組まれたり中島(2006)はこうした取り組みがみられた。90年代を棚田保全の「発展期」と位置付けている。

一方、棚田は一般的に急傾斜地に立地し、1枚の耕地面積が狭く機械化への対応が遅れているという条件不利地に該当することが多い。また棚田を抱える集落の多くは、中山間地域で過疎化の進行が著しく、耕作放棄や離農者の問題を抱えており、棚田は他の中山間地域が抱える多くの問題を凝縮していた。このような棚田を保全することは、中山間地域での農業の将来モデルを示すことにもつながるという見方もあり、1990年代半ばから2000年以降にかけて農林水産省や国土交通省、環境省、文化庁が各自の視点から棚田や中山間地域の保全の必要性を主張することとなる(春山1995)。そして、棚田保全は全国的に、より活発化した「充実期」(中島2006)を迎える。

以上のように棚田をめぐる多様なとらえ方によって、棚田保全に関する研究の蓄積が進む。その研究史は隣接分野まで含めば膨大であり、地理学の視点からの研究は中島(1999)、

また、河岸段丘上や山地では果樹の生産が盛んである。町の人口は2010年時7,856人(国勢調査)である。

朝日町の東部、最上川を眼下にみる能中集落に「榎平の棚田」が位置する(図2・図3)。田の枚数は約180枚で14haほどの耕地から構成され、傾斜は20分の1である。「榎平の棚田」は、戦時中の食料増産体制の下で開発された(朝日町史編さん委員会編2010,742)。能中集落は2010年農林業センサスによれば総農家29戸、うち販売農家20戸、自給的農家9戸、土地持ち非農家が6戸である。また2010年の国勢調査によれば世帯数は38戸、人口は127人(男69・女58)の集落である。「榎平の棚田」に耕地を持つ農家によれば、昭和50年以降、棚田の耕作者の間で、田1枚の区画を調整して耕作し易くしようという提案があがり、それに賛同した者の間で土地の整備が行なわれた。そのため、田1枚1枚は農業機械の導入が可能な面積である。

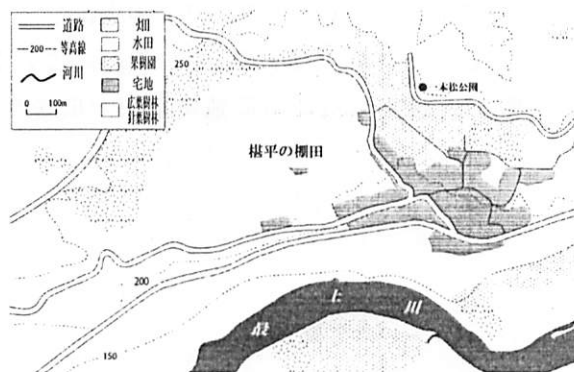


図2 「榎平の棚田」とその周辺

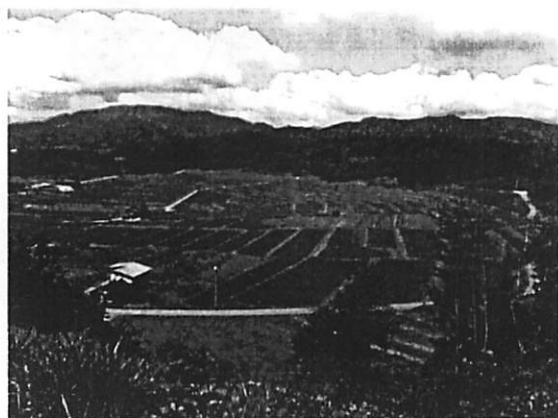


図3 「榎平の棚田」の風景
(2013年6月27日一本松公園より撮影)

II 「日本の棚田百選」選定に対する住民の反応

「榎平の棚田」は、1999年(平成11)に農林水産省「日本の棚田百選」に選定された。しかし、当時、この選定は住民にとって冷ややかなもので、関心をむけることは少なかったという。事実、能中集落における1995年の耕作放棄率は3.4%であったが、選定後の2000年には5.7%に上昇している(農林業センサスより)²⁾。その背景には、高齢化による離農者の出現など、日本の農村に通底する課題があった。

「日本の棚田百選」への選定や農村景観としての高い評価によって、能中集落は、離農者や耕作放棄の問題に対して迅速な対策を求められた。そこで2004年、山形県の主導によって「棚田の地域の未来を考える」と題するワークショップが開催された。それは能中集落における事実上初めての“棚田の将来像を、地域住民自らが考える”機会となった。このワークショップを足掛かりとして、「能中集落」は2つの軸で保全の方向へ動き出すことになる。以後、これら2つの軸についてみていきたい。

III 棚田保全の第1の軸

一 外部からの労働力の確保一

III-1 「棚田保全隊」の発足

第1の軸は棚田およびその周辺での農作業における外部からの労働力の確保であった。2012年時点で棚田の耕作をする農業従事者の平均年齢は62.4歳であった(聞き取り調査より)。今後、高齢化が進むことが予想された中、どのように棚田を維持していくかが問題とされた。そこで発案されたのが「棚田保全隊」であった。保全隊は、主に棚田での生産活動や維持管理作業、さらには棚田周辺の美化活動を役割とする。従来は、農業従事

者や地域住民で行っていた活動の一端を外部者に代行してもらうわけである。活動は、年間8回程度開催される。保全隊の隊員は、交通費等の自己負担が生じるが、労働の対価として作業後に「棚田チケット」を受け取る。これは、年末に開催される収穫感謝祭において「棚田米」や朝日町産のリンゴなどと交換できる。

保全隊の募集は2006年（平成18）に開始された。図4は、「榎平棚田保全隊」への登録者数の推移を示している。保全隊員の募集を始めた2006年（平成18）から2012年（平成24）までに、地区内外から約130人（累積合計）の登録があった。募集が開始された2006年は、その話題性もあり、登録者数が1年間で40人に及んだ。その後、2009～2011年までは10名前後の新規登録者数で推移した。2012年度（平成24）に前年の2倍近い21人の登録をみせるが、これは2011年3月に起きた東日本大震災によって山形県外から東北地方に対して支援を行いたいという参加者が多かったためという。

「棚田保全隊」の登録者の多くは山形県内に居住している（図5）。その内訳は山形市と朝日町を合わせた登録者数が山形県内の登録者数のおよそ8割を占めており、保全隊は主に朝日町および近隣市町村居住者から構成されていることがわかる。山形市中心部から「榎平の棚田」までは車でおおよそ1時間の距離にあり、棚田までの道路も決して悪くない。

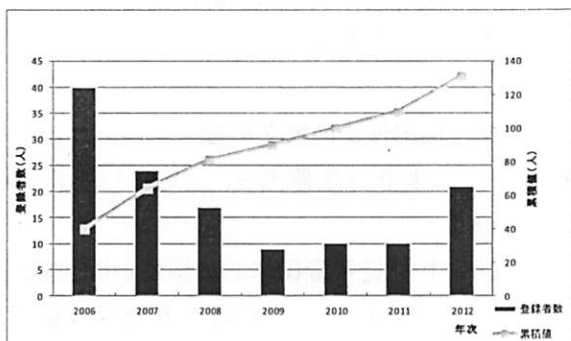


図4 「榎平棚田保全隊」の登録者数の推移
（朝日町土地改良区による提供資料より作成）

こうしたアクセスの良さに加え、棚田の周辺には温泉施設もあり、レジャー感覚で参加している保全隊員もみられる。また、首都圏の東京都、神奈川県などから参加者は、朝日町の出身であるという。登録者数は130名を超えたが、1回あたりの参加者は20名前後であるという。その人数で作業に支障がでることとはなく、毎回、円滑に農作業や景観美化活動が進んでいる。

Ⅲ-2 「棚田保全隊」の多面的な役割

「棚田保全隊」の募集要項には、「棚田での生産活動や維持管理、景観保全活動」や「棚田周辺の環境美化活動（ヒメサユリ祭）、自然乾燥米用の杭立て」への参加を求めると記されている。活動は6-12月までの8回程度であり、月別の主な作業内容は表1に示したとおりである。表1をみると棚田での米生産に関する作業補完としての農作業は③～⑥であり、自然乾燥米の作業が中心となっていることがわかる。後述するように「榎平棚田米」は、自然乾燥という工程によって一層の付加価値をつけている。自然乾燥は、杭に稲刈りをした稲束を掛け、それを何度か返して乾燥させる手法であり、手間がかかる上かなりの重労働である。その際の作業補完を「棚田保全隊」は担っている。

一方で、「棚田保全隊」の他の作業は、直接的には水稻栽培に関係していない。展望台や水路の草刈りは、棚田周辺の美化活動の位

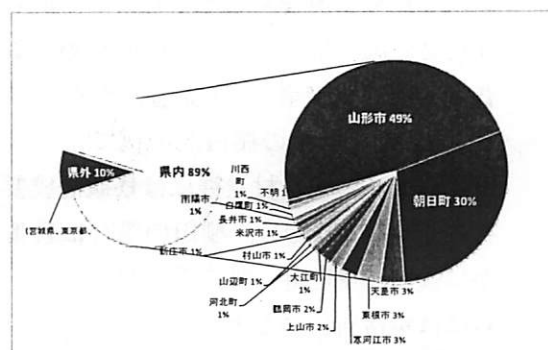


図5 「榎平棚田保全隊」の居住地 (2012年時)
（朝日町土地改良区による提供資料より作成）

表1 「樺平棚田保全隊」活動内容
(2012年6月)

	作業内容	時期
①	環境美化活動	6月4日
②	水路、展望台の草刈り	7月中旬
③	自然乾燥米用杭立て	9月中旬
④	稲刈り、杭掛け	9月中～下旬
⑤	杭掛けの返し	10月上旬
⑥	脱穀	10月中旬
⑦	ヒメサユリの球根植え	10月下旬
⑧	収穫感謝祭	12月上旬

資料：朝日町ホームページの棚田保全隊員募集のチラシより作成

置づけにあり、また樺平に自生しているヒメサユリの球根植えも同様の位置づけになる。すなわち、「棚田保全隊」は棚田における農作業の補完に主眼を置いていないことがわかる。そもそも、樺平は、山間地の棚田のような急傾斜地ではなく、棚田の認定基準ぎりぎりの緩傾斜である。さらに圃場整備がなされており、農業機械の導入が可能である。「棚田保全隊」の作業内容に田植えが含まれていないのはこのためである。

では「棚田保全隊」はどのような役割を期待されたのであろう。管見では上記以外に2つの役割を見出せる。1つは棚田を「みせる」行為への対応である。田林(2013)はWoods(2005)の考え方を引用しつつ、近年の「農村空間の商品化」としての傾向を指摘し、それは農村の資源が「売買」されることと説明している。さらに加えて、農村の消費には様々な形態があり、たとえば風景の鑑賞者は農村景観を視覚で消費すると言及した。消費という行為が働く場合、そこには財をめぐる「消費者」と「生産者」(販売者)が存在することとなる。「樺平の棚田」の例では、財は棚田景観である。農村景観には景観構成要素が存在し(岡橋1993)、棚田の場合は耕地のほかには溜池や畦畔、彼岸花、排水路、農道さらには集落居住区などが含まれるという(中島1999)。棚田景観が「商品化」されたとき、あるいはそれに気づいたとき、「生産者(販

売者)」側は棚田景観への配慮を求められた。棚田を構成する1枚1枚の耕地への配慮は、耕作者に求められることが自明となる。しかし、展望台や用水路といった公共性の高いもの、あるいは責任の所在があいまいになりやすい地物へは、「棚田保全隊」が活用されたとみることができる。

「棚田保全隊」のもう1つの役割は、地域住民間の交流・連携を図る媒介者という位置づけである。先述のとおり、保全隊の隊員には、労働の対価として作業後に「棚田チケット」が渡される。それは、年末に開催される収穫感謝祭において生産物と交換できるため、チケットを入手した保全隊はこのイベントへの参加意欲を高める。そして、この収穫感謝祭では「棚田保全隊」をもてなす会もあわせて開催される。この会は、地域住民にとっては外部者が当該地域で農作業や環境美化活動に従事してくれたことへの感謝が込められている。他方、「棚田保全隊」にとっては、提供された郷土料理を食し、地域住民と交流を持つ機会となっており、都市農村交流の意味合いが強い。

ところで、収穫感謝祭は二部構成となっており、第一部は地域外の「棚田保全隊」を慰労する会であり、第二部は地域内の保全隊および地域住民を慰労する会となっている。収穫感謝祭の準備や実施を通して生まれる地域住民間の交流・連携は、ともすればイベント的性格になりやすい一過性の棚田保全活動を、地域ぐるみで長期的に支えるためのバックグラウンドとなっている。

IV 棚田保全の第2の軸

－棚田米の販売－

IV-1 「樺平棚田米」の誕生と販売戦略

「樺平の棚田」で収穫された米は従来、農協に卸されていたが、県外の米穀業者からの棚田米の直売を申し込まれたことをきっかけ

表 2 棚田米の取引状況 (2012 年時)

	名称	販売量(kg)	本拠地	備考
県内	N社	100※	天童市	
	S園	9000	東根市	
県外	T社	18000~24000	静岡県熱海市	
	M社	3000	東京都大田区	
	N社	18000	神奈川県川崎市	店頭とインターネット通販「らいす mama」で一般向けに販売

※ 2011 年時の販売実績 資料：聞き取り調査より作成。

に販売方法を見直し、2008 年より米穀業者との直接取引を開始する。その際、榎平米生産組合を組織した。段階的に業者との取引量を増やし、2010 年以降は山形県内外の業者 5 件 (表 2) と全量を自主販売している。取引をしている業者は県内では天童市と東根市の 2 業者、県外では静岡県、東京都、神奈川県 の 3 業者である³⁾。2012 年度の販売量は、静岡県と神奈川県の業者それぞれで 18,000kg 超となり、とくに神奈川県の業者の販売した 4 割の米は、小田原市内にある百貨店で、高価なものは 5kg 当たり 3480 円で店頭販売された。

全量直売のメリットは、このように高い価格で米を取り引きできることに加え、出荷の手数料を低く抑える点がある。従来は 1 俵あたり 3000 円の手数料が発生していたが、生産組合では 500 円で済む。こうしたメリットにより、生産組合に加入する農家の評判も良く、全量直売は順調に継続されているという。

IV-2 「榎平棚田米」誕生の背景

棚田米を高価格販売し、農家の増収につなげようとする動きは、棚田の生産的機能を改めて捉えなおすことであった。そもそも「榎平の棚田」での米生産は決して効率的ではない。朝日町は、2005 年「農林業センサス」において、中間農業地域に位置づけられている。図 6 は、山形県の市町村における 10a あたりの収量と夏平均気温について示したグラ

フである。標高 200 ~ 220m あたりに位置する朝日町の 10a あたりの収量は、県下有数の豪雪地である西川町や小国町、冷害被害に見舞われる最上町に次いで低いことがわかる。棚田保全団体の代表者からの聞き取りによると、能中集落の反収も朝日町の反収とおおよそ同水準であるという。すなわち朝日町は米生産地としては決して有利な地域ではない。さらに「榎平の棚田」における農業用水は、ハッ沼の西側奥を流れる油子沢から取水し、トンネル 2 本と水路により、いったん春日沼に水をため、そこから棚田まで隧道で用水を

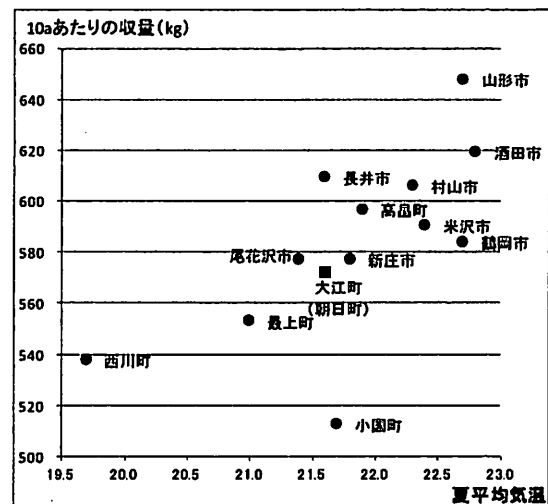


図 6 山形県の市町村における 10a あたりの収量と夏平均気温

10a あたりの収量は 2005-2012 年産の平均 (「作物統計調査」より算出)、夏平均気温は 1981-2010 年の 30 年間の観測値の平均による。山形県の気象観測地のある全市町村を選定。朝日町では気象観測はされていないが、地理的にもっとも近い大江町と 10a あたりの収量は同値であった。なお、「作物統計調査」の結果は山形県の場合、2005 年以前は市町村によっては行政区界が異なる。

表3 能中集落の農家に関する概要

年		1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010
総戸数(戸)		55	-	47	-	43	-	41	-	35
農家数(戸)	総農家	53	52	46	41	39	36	29	31	29
	販売農家	-	-	-	-	36	31	27	26	20
	60歳未満の男子専従者がいる農家	-	-	29	25	22	13	11	10	-
	農産物販売額1位が水稲の農家	41	28	20	16	10	11	9	10	5

1970-2010 年農業集落カードにより作成

流している。しかし、用水の安定供給から現在是最上川からも取水しており、揚水のための費用は水利料に加算されている。すなわち、棚田での米づくりは出費のかさむ耕作であった。

これに加えて、朝日町における農業は果樹中心という特徴が見いだせる。表3は、能中集落の概要を1970年から2010年までをまとめたものである。能中集落の総農家は1970年の53戸から徐々に減少していき、2010年には29戸にまで減っている。注目すべきは、1970年には農家の8割近くが水稲作中心であったが、2005年に4割を下回り、2010年には2割に満たない点である。朝日町では町をあげて名産品リンゴ、洋ナシなどの果樹生産に力を入れており、2007年の農業産出額は米が6億2000万円に対し、果実は17億9千万円である（生産農業所得統計より）。さ

らに、地目別の作付面積の推移をみると（図7）、樹園地の作付面積は1985年以降、田の作付面積よりも多い。農家によっては果樹による収入が全農業収入の2分の1から3分の1を占めるといい、果樹栽培の位置づけは大きい。

こうした特徴は、棚田で耕作する農家についても同様である。表4は11農家の耕地面積を示している。11農家のうち、棚田に1ha以上の耕地を有する4農家は、朝日町内に1ha以上の果樹を作付している。果樹中心の農家において、棚田での米づくりはともすれば意欲的になれない雰囲気のある中、棚田で耕作する農家のモチベーションをいかに高めるかは、棚田の維持に直結する。棚田米の全量直販による高価格販売は、棚田の持つ生産的機能という本質を強化することでもあった。

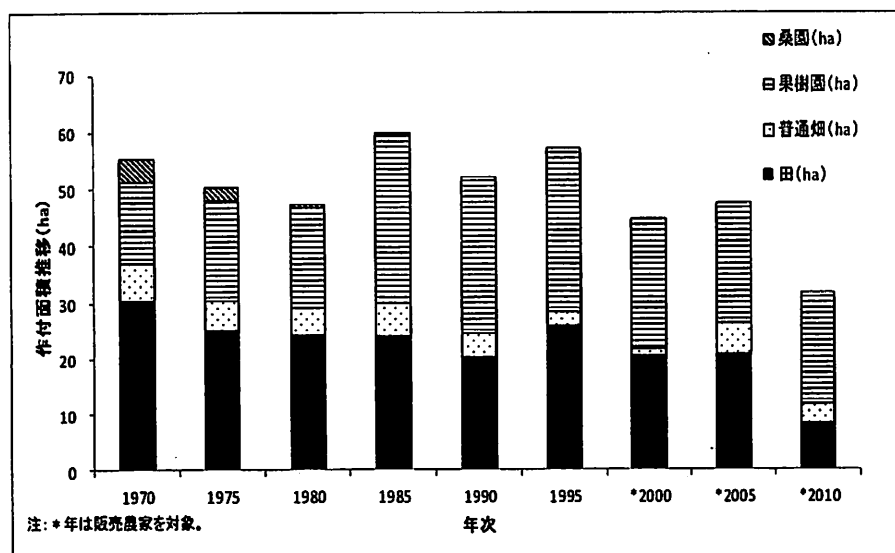


図7 能中集落における作付面積

注: *年は販売農家を対象。資料: 1970～2010年農業集落カードにより作成。

表4 棚田耕作者の耕地面積

no.	棚田の所有耕地面積(a)	樹園地の面積(a)	棚田米の用途	棚田米の自然乾燥米割合(%)
1	61	70	販売用	60
2	60	0	販売用	0
3	120	200	販売用	0
4	11	0	自給用・販売用	100
5	15	0	自給用	100
6	11	10	自給用・販売用	100
7	50	130	自給用・販売用	100
8	50	0	自給用・販売用	30
9	220	100	販売用	0
10	2~3	借地160	販売用	100
11	79	45	販売用	100

樹園地の面積は、2012年の作付面積である。

V 「榎平の棚田」をめぐる変化

V-1 首都圏からの観光客の来訪

1999年の「日本の棚田百選」への選定や「美の里づくりコンクール」における受賞などにより、知名度を高めた「榎平の棚田」は朝日町内外から来訪される対象となった。さらに2006年からは「棚田保全隊」の発足により、地域外から能中集落へ定期的に隊員が訪れるようになった。朝日町外からの来訪者の増加に一層拍車をかけたのが、首都圏からの観光客であった。

図8は2009～2011年における朝日町外からの「榎平の棚田」への来訪者の数を示している。この集計は、朝日町エコミュージアムに問い合わせや協力依頼があった団体のみを集計しているため、実際はさらに多くの来訪者がいたと考えられる。これをみると、2010・11年にかけて、大手旅行会社が企画したツアー客を中心に、300～500人程度来訪していることがわかる。その代表はクラブツーリズム株式会社である。この旅行会社では、2010年からこの時期の山形を巡るツアーの行程に「榎平の棚田」が常時組み込まれているという（ツアーコンダクターへの聞き取り）。2013年6月のツアー名は「みちのく屈指の名宿5つ星「滝の湯」高級サクランボ狩りと山形の原風景を訪ねて…」であった。1

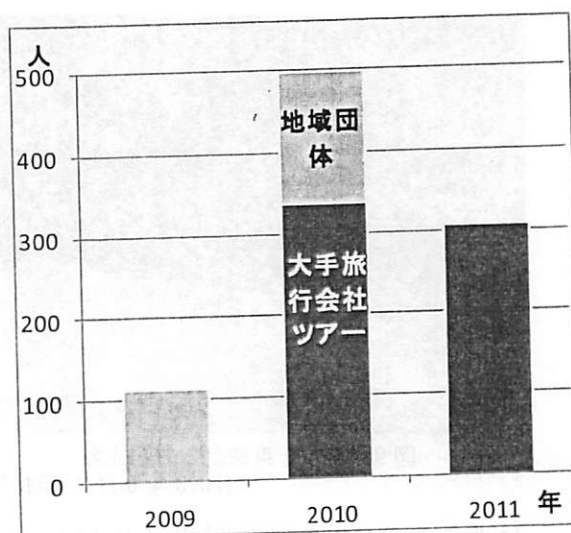


図8 榎平の棚田に訪れた観光客
朝日町エコミュージアム提供資料により作成

泊2日の東京出発のツアーで、価格は1人あたり30000～40000円である（出発日に応じて価格が異なる）。ツアー名からわかるように、このツアーの目玉はサクランボ狩りと高級旅館への宿泊である。1日目にサクランボ狩りを体験し、2日目に「榎平の棚田」見学が予定されている。クラブツーリズムの添乗員によれば、このツアーは団塊の世代をターゲットとしており、彼らが幼少期に見慣れた風景を求めるツアーは集客が安定しているという。

「榎平の棚田」への首都圏からの来訪が可能となった要因として、ハード面での環境整備へも着目しなければならぬ。とくに2010年からこの棚田がツアー訪問地として定着した背景には、同年に完成した東屋の影響が大きい。棚田を一望できる展望台（一本松公園）につづく道の途中には、朝日町によってトイレの付属した東屋がつくられ、そこには乗用車5台分の駐車スペースも完備している（図9）。また展望台（一本松公園）へ続く道は大型バスの乗り入れが可能な幅員で、展望台近くにはバスがUターンできるほどの空地もある。こうした施設面での環境整備も来訪者を増やす大きな要因となった。

これに加え、来訪者には現地ボランティア

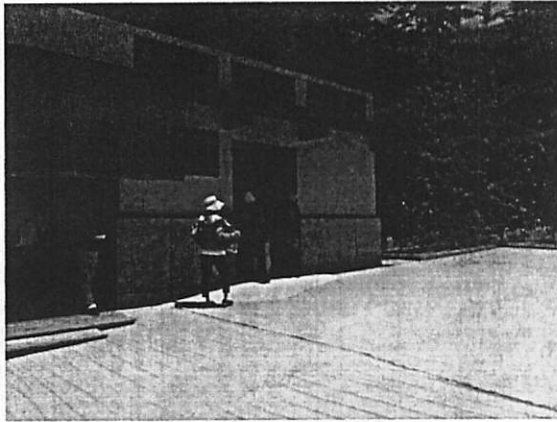


図9 東屋と東京からの観光客
(2013年6月27日撮影)

による説明がなされる。「榎平の棚田」は朝日町のエコミュージアムの中に位置づけられる。エコミュージアムとは地域全体を博物館として捉える活動である。2000年にNPO法人朝日町エコミュージアム協会が発足し、同年、その拠点施設として「創遊館」が設立した。ここではエコミュージアムのサテライト（見学地）の支援がなされる。さらに観光客や視察者に対するサテライトの説明は現地住民から構成される「案内人の会」が担当する。「榎平の棚田」もエコミュージアムのサテライトの1つであり、観光客に対する案内や現地説明は棚田への来訪者を増やす一因となっている。

V-2 棚田をめぐる変化に対する住民の反応

1999年の「日本の棚田百選」に選定されて以降、「榎平の棚田」は地域内外の関心を集めるようになった。こうした動向を住民はどのように感じているのだろうか。

本研究では、2012年12月～2013年1月にかけて対面式アンケート調査を実施した。被調査者は能中集落の住民で、棚田を耕作する11名、棚田に耕地を持たない4名である。調査の主眼は、棚田をめぐるどのような変化を感じているか、またそれをどのように受け止めているのか、といった点である。

表5は調査結果を集約したものである。ま

ず、棚田を耕作する11名については、全員変化を感じており、とくに「地区への観光客増加」と「地区内外からの関心の高まり」の回答がもっとも多い。つぎに多いのが「公園等の整備」と「棚田景観の美化」についての変化であった。「耕作放棄地の減少」と「支援による農作業負担の軽減」は、上述の項目と比較すると回答数は少なかった。このような結果は、棚田に耕地を持たない4名についても類似の傾向がみられた。すなわち、被調査者が感じている地区内でのもっとも大きな変化は、地区外からの訪問者の増加と受賞等による外部からの関心の高まりであったことがわかる。つぎに地区内での変化として捉えられたのは、「棚田保全隊」による周辺環境の整備であった。農作業の負担軽減について回答が分かれたのは、先述のとおり、「棚田保全隊」の主な役割が農作業の負担軽減に力点を置いていないためと考えられる。

それでは、こうした変化を住民はどのように受け止めているのであろうか。調査結果では変化を好意的に受け止めている被調査者が多い。その理由としては、地区内外での交流が増えた（No.5.7.9）という意見や地区の活性化につながる（No.1.12）という意見がみられた。こうした変化をいつ頃から感じているかの問については、回答にばらつきがあるが、「日本の棚田百選」に選定された1999年（平成11）、地区の将来についての話し合いの場（ワークショップ）が開かれた2004年（平成16）、「榎平棚田保全隊」の募集が開始された2006年（平成18）におよそ同数の回答があった。

No.13の被調査者の感想には「棚田、一本松公園を訪れてくれる大勢のお客様との話し合いやお茶を飲みながらの漬物の話し合いができる事、県内外からの方との出会いで本当に村が明るくなった。」とあるが、展望台へ続く道の途中にある東屋には、6～7月の週末、能中集落の農家の主婦たちにより、お茶

表5 能中集落の住民における棚田をめぐる変化に関する認識

被調査者の概要					地区内の棚田に関する変化について							変化の 時 期	この変化を どう感じるか	その理由	
番号	性 別	年 齢	職 業	家族構成	棚田の所有 耕地面積(a)	支援による農作業 負担の軽減	棚田景観 の美化	耕作放棄 地の減少	地区への 観光客増 加	公園等の 整備	地区内外 からの関 心の高まり	変化なし			
1	男	57	会社員	F47・ F22・ M13・ M83・F81	61	○	○		○		○		平成18年	良い	地区の活性化の為
2	男	50	会社員	M77・F76	60	○	○		○		○		平成16年	ND	ND
3	男	51	農家	F51・ M76・M71	120				○	○	○		平成11年	良い	興味を持ってもらうのは良い事。
4	女	63	専業主婦	M63	11	○		○	○	○	○		平成11年	良い	多くの方々に少しでも喜ばれるようになれるから。
5	男	64	農家・自営業	F88	15		○		○	○	○		平成18年	良い	地区民及び地区内外の人との交流が増えた。
6	男	62	農家	F63	11				○		○		平成18年	分からない	
7	男	64	農家	F65・ M37・F33	50	○	○	○	○	○	○		平成11年	良い	地域内の協力体制ができ、地区内の交流が盛んになった。
8	男	68	自営業	F68・F92	50				○	○	○		平成16年	良い	ND
9	男	63	農家	F59・ M30・M90	220		○			○	○		平成16年	良い	棚田に認定され大勢の人が訪れることになり、意識の変化が出てきて地域住民が棚田、一本松公園を通じて共通の課題に取り組むようになってきた。
10	男	68	農家	F65・ M40・ F39・ M12・F8・ M1	2～3				○		○		平成18年	良い	観光客が来てくれる。
11	男	72	農家	F70・M43	79		○	○	○	○			平成16年	良い	ND
12	男	71	農家	F63・M37	0	○	○	○	○	○			平成16年	良い	集落全体の活性化につながった。
13	女	77	無職		0	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	棚田、一本松公園を訪れてくれる大勢のお客様との話し合い又お茶を飲みながらの漬物の話し合いができる事、県内外からの方との出会いで本当に村が明るくなった。
14	男	51	農家	F82	0			○	○	○			平成11年	分からない	ND
15	男	62	無職	F56・F86	0			○		○			平成11年	良い	自然とのかかわりを持つ農業についての関心が少し高まっていると思う。
合計					5	7	6	12	10	10	0				

M:男性、F:女性、NDは回答なし

や郷土の漬物などが提供されている。それらを介して地域住民と地域外訪問者との間に交流が生まれている。

V-3 棚田をめぐる取り組みの足跡

本節では、上述した棚田をめぐる様々な取り組みについて、その開始時期を時系列的に見ていき、「榎平の棚田」をめぐる取り組みやそれを通じて起きた変化について考えていきたい。

表6は各種取り組みや出来事を1999年以降について整理したものである。これによれば、2013年時点まで「榎平の棚田」をめぐる取り組みや出来事は大きく3つの時期に区分される。

第1の時期は、棚田保全に力点を置いた2001～2006年頃までに期間である。「日本の棚田百選」の選定を背景に「榎平棚田保全活動推進委員会」が設立し、各種下部組織（「棚田ママの会」「棚田保全隊」）が結成された。こうした下部組織によって、主に地域外からの棚田景観への対応が図られた。

この取り組みが軌道にのった2008年以降に着手されたのが、第2の時期2008～2011年頃までの棚田米生産・販売重点化の取り組みであった。上述のとおり、棚田の生産的側面を改めて捉えなおしたこの取り組みは、棚

田はそもそも生産空間であり、その側面にこそ強い意味づけをしなければ、持続的な棚田保全はなし得ないという思いの表れであった。

すなわち、第1の時期は棚田景観維持への対応、第2の時期は棚田の生産的側面の強化であったと換言される。

以上の取り組みが軌道にのった2010年以降は、第3の時期に位置づけられる行政による棚田周辺のハード面における環境整備の期間である。集落の取り組みや観光客の来訪に一定の評価を示した朝日町は、東屋や標識の設置を進めた⁴⁾。このことは前節で述べたとおり、観光客の増加を生みだし、地域住民へ「地域活性化へつながっている」「村が明るくなった」という想いを生みだすことに寄与している。

以上のように整理すれば、本事例から2つの知見を得られる。1つは各種取り組みが、短期的に開始されたのではなく、段階的に着手されている点である。その過程では、個々の取り組みが実施状況を注視しながら、必要に応じて修正や調整を図っていた。その結果、個々の取り組みが軌道にのると次期の取り組みが開始される、あるいは次期の取り組みにつながるきっかけとなった。

もう1つの点は各種取り組みの中には複数

表6 「榎平の棚田」をめぐる取り組みの足跡

西暦	援農・交流	営農	環境整備	観光客	評価
1999					
2000					「日本の棚田百選」選定
2001					
2002					
2003	棚田保全活動推進委員会 ●棚田ママの会発足 ●ワークショップ「棚田と地域の未来を考える」を開催 ●活動計画発表のためのシンポジウム開催				
2004					
2005					第1回美の里づくりコンクール農村振興局長賞受賞
2006	「棚田保全隊」活動開始				写真コンテストと写真展を開催
2007		棚田米生産組合発足 棚田米として販売開始			やまがた棚田20選に選定
2008				観光客の増加	
2009					
2010			東屋設置		
2011		全量直販			「地域づくりのやまがた景観賞」の山形経済同友会賞受賞
2012			案内標識設置		
2013					

の効果有している例が見られる点である。たとえば、棚田米の自然乾燥の過程でみられる杭掛けは、棚田米としての高価格販売に必要な過程であるが、他方で稲刈り後の棚田に、まるで人間が整列しているようにみえる夥しい稲杭の風景は「榎平の棚田」の秋の美景として捉えられ、魅力的な被写体となっている。

また、棚田米の高価格販売は、農家にとって、棚田での米生産のモチベーションをあげただけでなく、耕作放棄対策へもつながった。事実、2000年における能中集落の耕作放棄率は5.7%であったが、2005年は3.1%となった。耕作放棄地の減少は、棚田景観としての評価を一層高めることになり、観光客の増加に寄与していく。

このように各種取り組みが、多方面へ影響を与えることで、地域内外の人々の関心を高め、結果的に棚田保全に貢献しているといえる。

VI おわりに

本研究では山形県朝日町能中集落に立地している「榎平の棚田」で行われている棚田保全を目的とした各種取り組みについて明らかにしたうえで、各種取り組みが必要とされた背景やその影響について検討した。

「榎平の棚田」での棚田保全活動は、生産者の棚田での複合的生業の側面を維持しながら、棚田を「みせる」という行為においては、その対応の一部を外部に求めたと理解される。すなわち、大局的にとらえれば、棚田での生産と棚田景観を「みせる」ための労務の主体は分業化していた。分業された背景には、そもそも棚田での米生産は決して困難だったわけではない。「榎平の棚田」は圃場整備されており、機械化の進展にも対応できている。さらに棚田の傾斜がきわめて緩く、「棚田百選」に選ばれた急傾斜の棚田に比して、耕作容易な棚田として位置づけられる。

すなわち、「榎平の棚田」が直面した課題は、棚田での労働力不足ではなく、米生産を継続させるだけの生産者のモチベーションの維持であった。本論で述べたとおり、棚田保全活動の各種取り組みは、棚田の維持に一定の役割を果たしていたと評価される。

こうした特徴は、三重県熊野市紀和町丸山地区や大阪府能勢町長谷地区などのように100口以上の棚田オーナーを抱え、大規模な保全活動が展開している棚田とは一線を画する。すなわち、「榎平の棚田」保全にみられる独自性は、外部からの協力や参画を最小限にとどめたところにある。棚田での農業経営の自立性を確保しながら、その維持を図るための仕掛けとして保全に向けた取り組みは機能しているとみるべきである。

さらに「榎平の棚田」は、山形市や周辺市町村とのアクセスがよく、周辺道路は大型バスの乗り入れも可能で、「みせる」行為が持続する立地にあることも大きい。

全国的に棚田保全に関する研究が進む中で、研究の蓄積の多い「鴨川市や千曲市などにおける棚田保全活動の事例は例外的存在であり」、むしろ「複合的生業のなかで、稲作が小規模に自給的に継続されている」例のほうが多数であるという指摘(吉田2011)がある。

この文脈に沿って本事例を位置付ければ、「榎平の棚田」も例外的な棚田と理解される。「日本の棚田百選」の選定に有無にかかわらず、日本の棚田の立地やそこに内在する課題は多様である。こうした中で本研究は、棚田での米生産を複合的生業のなかで、いかに持続させていくかという課題に対して、棚田オーナー制を採用せず、生産空間としての棚田と「商品化した」棚田景観の双方にその答えを見出した一事例として位置づけられる。

謝辞

本論文作成にあたっては、樺平棚田保全会の志藤勝幸氏をはじめとする保全会の皆様、NPO 法人朝日町エコミュージアム協会の長岡信悦氏をはじめとする協会の皆様、アンケート調査にご協力いただいた能中集落の皆様、クラブツーリズム株式会社、朝日町総合産業課交流観光係の皆様にご多大のお世話になりました。ここに記して御礼申し上げます。本稿の作成には山形大学事務補佐員の上野玲子氏の協力を得た。なお、本報告は2013年に提出した高橋悠の卒業論文を大幅に改訂したものである。なお、本研究は2013年8月10日茨城地理学会で発表した。本研究は山形大学農学部鶴窓会学生研究支援事業による研究助成を受けている。

注

- 1) 月刊『地理』では1997年9月号で「特集 棚田—環境と社会を考える」が組まれている。
- 2) 農林業センサスにおける耕作放棄率は分析指標として提示されているが、その算出は農家調査(属地調査)の結果、農業集落ごとに集計した経営耕地面積などから算出しており、他の農業集落にある経営耕地面積や耕作放棄面積も含んだ上での数値となる。したがって、厳密な意味での能中集落(属地)での耕作放棄地率ではないが、聞き取りによれば、耕作放棄率の上昇には、「樺平の棚田」での耕作放棄が影響しているという。
- 3) この時取引されるのは棚田米だけでなく、能中集落内の田で収穫された米もまとめて出荷できている。すなわち棚田米以外の米も余すことなく出荷できるメリットがある。

- 4) 東屋をめぐっては以下のような経緯がある。1999年に「日本の棚田百選」に選定された直後、町内企業6社からの寄付金を得た。それをもとに2002年頃に仮設トイレが設置された(現在の東屋がある地点)。その後、2003年頃に町議会議員より恒久的な休憩所兼トイレの設置が提案されたが、すぐには議会承認されなかった。その後、観光客の増加などもあって、2009年頃に議会にて承認され2010年に設置された。

文献

- 朝日町史編さん委員会編(2010):『朝日町史 下巻』朝日町。
- 岩本通弥編(2007):『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館。
- 大島暁雄(1997):「耕して天に至る—棚田(千枚田)保護の現在—」月刊文化財 400, 6 ~ 13.
- 岡橋秀典(1993):「ルール・デザインの展開と農村景観論」地理科学 48, 255 ~ 268.
- 神田竜也(2007):「棚田保全活動の展開とその役割—岡山県中北部の2集落を事例として」人文地理 59-4, 332 ~ 347.
- 根井かおる・三宅康成・松本康夫(1999):「棚田保全活動の現状と課題」農村計画論文集 1, 79 ~ 84.
- 田林 明(2013):「商品化する日本の農村空間」田林明編『商品化する日本の農村空間』農林統計出版, 1 ~ 14.
- 田林明・横山貴史・大石貴之・栗林賢(2011):「山形県におけるエコミュージアム活動による地域振興」地理空間 4-2, 111 ~ 148.
- 寺本幸雄(2016):「中山間地域における棚田耕作・保全の実態—社会関係資本に注目して—」空間・社会・地理思想 19, 35 ~ 48.
- 中島峰広(1999):『日本の棚田—保全への取

組み』古今書院.

中島峰広 (2006) : 「棚田保全の潮流」 環境情報科学 35-1, 30 ~ 35.

日本村落研究学会編 (2005) : 『消費される農村—ポスト生産主義下の「新たな農村問題」』 農山漁村文化協会.

林良博・高橋弘・生源寺眞一 (2005) : 『ふるさと資源の再発見—農村の新しい地域づくりをめざして』 家の光協会.

春山成子 (1995) : 「棚田と環境」 地理 40-2, 103 ~ 106.

吉田国光 (2011) : 「山村における棚田維持の背景—長野県中条村大西地区を事例として—」 人文地理 63-2, 149 ~ 164.

Wood, M (2005) Rural geography : processes, responses and experiences in rural restructuring .
Sage Publication, London

Benefits of a rice terrace landscape
— Case study of the “Kunugidaira rice terrace” in Asahi-town,
Yamagata Prefecture —

Yu Takahashi (Graduate of Yamagata University)
Rie Watanabe (Yamagata University)

This study describes the effects of activities undertaken by the population in an area to conserve its rice terraces, focusing on the “Kunugidaira rice terrace” in Asahi-town, Yamagata Prefecture. Such activities in Japan are taken up mainly to achieve any of these three specific objectives: 1) to promote agriculture, 2) to enable interaction and networking, and 3) to develop tourism. This study focuses on a rice terrace in which different activities are ongoing simultaneously for potential rice terrace conservation.

The “Kunugidaira rice terrace” is located in Asahi-town, which lies in the central part of Yamagata Prefecture, with its main occupation being agriculture, particularly fruit cultivation. The 2010 census shows the population of the town as 7,856.

The Kunugidaira rice terrace can be seen spreading more toward the eastern part of the town, in an agricultural colony known as Nojyu. The terrace comprises about 180 paddy fields on a 14-hectare wide slope with a steep grade of 1 in 20.

This rice terrace was selected as one of Japan’s top 100 rice terraces by the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries of Japan in 1999. However, few local residents paid any attention to this news at that time. As matter of fact, the ratio of uncultivated farmland increased to 5.7% in 2000 from 3.4% in 1995 (Report on Results of World Census of Agriculture and Forestry in Japan). This was attributed to the increasing number of people who had given up farming due to old age. In 2004, the people of the village of Nojyu held a meeting and decided to take up two activities to conserve its rice terraces.

One was to seek labor from outside the agricultural colony to help in the conservation. Recruitment started in 2006, and more than 130 supporters were active as of 2012. These supporters work together about eight times a year, for example, to mow the grass around the waterways or to harvest rice. Another main activity also involved beautification around the terraces, such as maintaining a park overlooking the terraces and growing flowers in it. The rice terrace landscape thus comprised not only paddy fields, but also the surrounding waterways and raised walkways. Therefore, people had to play an active role in maintaining these surrounding areas as well.

Another activity planned was to sell the rice harvested from the terrace fields. Rice farming in terrace fields is more difficult than that in flat fields. The yield per 10 acre is less than that of flat fields. However, the large difference between day and night temperatures in terrace fields makes the rice more sweet and tasty. The “tanada mai” or the superior quality rice from the “Kunugidaira rice terrace,” is sold at a higher price.

These activities have been largely responsible for the increasing number of tourists since 2004, who have been coming to see the rice terrace and for whom the town has built public toilets and parking

lots. As a result, the town started attracting bus tours from Tokyo and it became a popular destination. This brought about a positive change in the attitude of the village farmers, contributing to a decrease in uncultivated land.

This is an ideal example of a case in which a particular area found a solution to its local issue of cultivation abandonment by making effective use of the rice terrace landscape and adding value to the rice produced there. These diverse activities motivated the local farmers to resume rice production on the rice terrace. The results were apparent from the increased tourism and the high commendation from outside the region.